

「脱出」としての自由

——リチャード・ライトとその作品——

齋藤 忠利

(53) 「脱出」としての自由

一九六〇年十一月二十八日にパリで急逝したアメリカの黒人作家リチャード・ライト (Richard Wright) は、長いとはいえない、その一生の間に、短篇小説集一、長篇小说五、その他に、講演集、旅行記などを書きのこしている。そして、一九五八年に発表した長篇小说『長い夢』(The Long Dream) が、彼の作品としては最後のものとなった。ところで、この小説は、ミシシッピ州クリントンヴィルに住む黒人の葬儀屋の息子レックス・タッカーが、性と暴力の世界に目覚め、白人社会の腐敗墮落(たとえば、賄賂を取る白人の警察署長などによって代表され

る。)に巻き込まれて苦しみながら、やがて、アメリカを捨ててパリに逃げるまでを語った作品である。「長い夢」とは、黒人として白人優位の社会に生きるということだが、主人公レックスにとって、いわば、いつ果てるとも知れぬ長い夢(しかも、悪夢)の中に生きることには他ならないことを意味している。そして、このことは、大体そのまま、黒人作家ライト自身の生いたちについて言えることであって、ライトは、たとえば、家を出てメンフィスで働いた時の生活を回想して、「ライトの自伝小説『黒い少年』(Black Boy) (一九四六年)の記述をそのまま事実として受け取ることが許されるならば」「わたしの毎日、一つの、長い、おだやかではあるが、たえず封じ

こまれている、恐怖と緊張と不安の夢であつた。」(傍点
は筆者)と書いている。夢の中に生きるということ——
それは、自分が自分でない世界、自分で自分を知らない機
会を持ってない世界、それに対して責任の取りようのない世
界、自覚的に生きること拒否された世界に生きること
である。それでいて、その世界は、いつなんどき、思
いもかけない方向に動いて、そのなかに生きる黒人の生命
を脅かさないとも限らない世界である。『長い夢』の主
人公レックスは、アメリカを脱出することによって、そ
の「長い夢」を終らせるのであるが、そのアメリカ脱出
が、たとえ、どんなに安易で唐突に見えようとも、(こ
のことが、この長篇小説を迫力を欠いた作品にしている原因の
一つと考えられる。)レックスにとって残された唯一一つの
道なのだ、と作者ライトは言いたのであろう。

「脱出」——このことに焦点を置いて、リチャード・
ライトの人と作品を考えようとするのが、本稿の目的で
ある。

二

さて、リチャード・ライトは、一九〇八年九月四日、

ミシシッピ州南西部のナッチェズ市から二十五マイルは
なれた農園で、貧しい黒人を両親として生まれた。その
生い立ちには、さきにも一寸ふれた自伝小説『黒い少年』
(この作品は、ライトの作品としては最もすぐれたものと考
えられる。)に描かれているところを、大体その通りに受け
取ってよいかと思われるが、ライトは、早くから父親に
見捨てられ、洗濯女として働く母親に養われるが、その
母親も卒中で倒れて身体が自由がきかなくなる。そこ
で、ライトは、祖母の手で養育されたりして、その日の
食事にも事欠くような生活をつづける。十五歳のとき、
ライトは、メンフィスに出て、眼鏡工場で働く。このメ
ンフィスにいる間に、白人名儀で図書館から本を借り出
して読むが、そのうちの一冊、H・L・メンケン(H. L.
Mencken)の『序言集』(A Book of Prefaces)(一九一七年)
が、作家になろうとするライトの決心をいよいよ固いも
のにした。ライトは、『序言集』を読んだ感想として、次
のように書いている。

「……そうだ、この人は、言葉で戦っている。言葉を
武器として、ちようど棍棒を使うように言葉を使ってい
る。言葉が武器になるのだろうか。そう、なるんだ。現

に、なっている。それなら、ひょっとして、わたしにも、言葉⁽¹⁾を武器に使えぬものか。いや、滅相もない。わたしは読みつづけた。そして、そこに言われていることよりも、そういうことを言う勇氣のある人がいることに、わたしは驚いた。⁽²⁾」

〔因みに、ライトが読んだ最初の本格的小説は、シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis) の『本町通り』 (Main Street) (一九二〇年) であり、また、セオドア・ドライサー (Theodore Dreiser) の『シスター・キャリー』 (Sister Carrie) (一九〇〇年) と『ジェニー・ゲアハート』 (Jennie Gerhardt) (一九一一年) を読んで、「わたしは、母親の苦勞を今更のように痛感した。わたしは、圧倒されてしまった。わたしは、黙りこんで、わたしを取り巻く人生について考えた。この二冊の小説から何を擲んだかを人に話すことは不可能だったろう。だって、それは、人生そのものの実感に他ならなかったからだ。これまでの生活経験から、わたしは、写実主義的、自然主義的な現代小説を歓迎する人間になっていたが、この二冊の小説は、いくら読んでも読み飽きるということがなかった。」とライトは書いている。〕

やがて、ライトは、一五〇ドルの金を懐にしてシカゴに出ることになるが、ここで、きっぱりと、自らの故郷を捨て、アメリカ南部の社会から脱出したのである。北部行きの汽車に乗って南部を去るときの心境として、ライトは、「その翌日、わたしが——北部行きの汽車に乗って——逃走していく時になっては、あれだけの様々な力が働いて、わたしが、わたしを形づくった文化を拒否するようになった、その説明は、たとえ求められても、出来なかったことであろう。わたしは、後めたさを感じることなく、ただの一度も振り返ったりせずに、南部をはなれていった。わたしの見慣れてきた南部の顔は、敵意にみち、近寄りかたかった。それでも、あれだけの衝突、罵倒、なぐり合い、怒り、緊張、恐怖がありながら、そのなかから、わたしは、これとは違った人生がある筈だ、もっと充実した、もっと豊かな生き方がある筈だ、という考えを、なんとか手に入れていた。孤児院を逃げ出した時と同様に、わたしは、今、何かに向かって、というより、何かから逃がれるために走っていた。しかし、そんなことは、わたしにとって問題ではなかった。わたしは、なんとしてでも逃げ出さねばならない。ここ

に留まるわけにはいかない——そういう気持だった。」
と書いてある。こうして、ライトは、アメリカ南部を脱出した。しかし、身も心もアメリカ南部をはなれざることは出来ないことを、ライト自身が、誰よりも良く承知していた。ライトの感覚は、南部によって、すでに、作りあげられていたし、黒人とはいえ、ライトの人格、また意識の中に、南部の文化が、徐々に注ぎ込まれていた。ライトは言っている——「だから、南部脱出は、南部の一部をたずさえて行って、異郷の土に移植することであった。果して、別な育ち方をするかどうか。新しい、さわやかな雨を吸い、異郷の風にたわみ、よその土地の太陽のぬくもりを感じて、ひょっとして、花をひらくかどうか。……」

シカゴに出たライトは、さまざまな職場で働きながら生活費を稼ぎ、やがて母親を手許に呼び寄せて、養った。職場での交際から白人の友人も出来るが、ある時、友人の一人でユダヤ人の男から、その男が入会している革命的な芸術家団体ジョン・リード・クラブの会合に出席してみないか、と誘われる。作家修行に助力が得られるだろう、というのである。最初、気乗り薄だったライトは、

ある土曜日の午後、読書にも飽きて、そのクラブを訪れる気持になり、行ってみると、そのクラブの雑誌『左翼前線』の編集会議に出席してみないか、といわれる。そして、その日、左翼雑誌『マッシュズ』(Masses)のバック・ナンバーと文芸雑誌『国際文学』(International Literature)を数部貰って帰るが、その夜、寝床で『マッシュズ』を読んだライトは、正に、目から鱗が落ちるような思いをする。ライトは、この世界に被圧民族の生活の真相を知ろうとする組織的な試みの存在することに驚き、翌朝まで『マッシュズ』をむさばるように読みふけるのである。

ライトは、そのときの体験にふれて書いている——「わたしの心を惹きつけたのは、共産主義の経済学でもなければ、労働組合の偉大な力でもなく、地下にもぐった政治活動の興奮でもなかった。わたしの注意を捉えたのは、諸外国の労働者たちの経験が相似ている点であり、はなればなれではあるが同胞といてよい諸民族を一つに統合する可能性であった。やっと、ここ、革命的な表現が通用する領域において、黒人としての経験が、その所得、価値ある役割をはたし得るように思われたのであった。わたしの読んだ、その雑誌から、当然の権利を奪わ

(57) 「脱出」としての自由

れた人々の経験を聞かせてくれ、という熱っぽい叫び声
が聞こえてきた。その声には、宣教師の、舌足らずな、
口ごもるような調子はなかった。その声は、『我々のよ
うになれば、好きになってやれぬこともない。』などと
は言っていないかった。『自己のありのままの姿を臆せず
話すだけの勇気が持てるならば、聞き手のあることを知
るであろう。』と言っていた。その声は、人生を信ずる
ようにと、人生にすすめていた。⁽⁶⁾

こうして、ライトは、生まれて始めて、自分の発言を
聞いてくれる耳のあることを感じて、『マッシュズ』を読
んだ、その興奮のなかで、タイプライターにむかい、一
気に自由詩を一篇書きあげるのであるが、その後ライト
の書いた数篇の詩は、夫々、ジョン・リード・クラブの
雑誌『左翼前線』に採録され、『マッシュズ』の後身にあ
たる『ニュー・マッシュズ』(New Masses)に送られたりす
る。

さて、左翼的なジョン・リード・クラブには、共産党
員の会員があり、ライトは、このクラブの会合に出席す
るうちに、クラブの会員である共産党員たちの自己犠牲
的な熱心に心を動かされ、ひそかに、黒人共産党員た

ちの伝記的スケッチを書くこうと考えるようになる。とこ
ろで、間もなく、このクラブの指導権をめぐる分派争い
が表面化し、役員の変更が行なわれることになるが、ラ
イトは、黒人であり新参者である点を利用して、クラ
ブの役員に選出されてしまう。役員になって、ライト
は、共産党が、共産党員である会員を通じて、このクラ
ブを動かしてきていたことを知る。共産党は、ライトが
新しい役員になると、クラブの雑誌『左翼前線』の廃刊
を指令してくる。そこで、ライトは雑誌を守るためもあ
って、共産党に入党する手続きをとる。こうして、ライ
トは、一九三二年から一九四四年まで、共産党員として
活躍することになるのであるが、同志の黒人共産党員た
ちの経験をいろいろと聞いていくうちに、ライトは、黒
人共産党員の伝記的スケッチを書く計画は中止して、そ
の代り、その人々の経験を材料にして一連の短篇小説を
書くことを決心する。こうして生まれたのが、短篇『ピ
ッグ・ポリーの故郷脱出』(Big Boy Leaves Home) (一九
三六年)である。「因みに、この短篇は、その後、ライ
トとしては最初の短篇集『アンクル・トムの子供たち』
(Uncle Tom's Children) (一九三八年)に採録される。」

以上見てきたところからも分かるように、リチャード・ライトは、共産党員としての活動のなから、作家として登場してくるのであるが、たんに左翼的な立場、乃至は、社会的な関心から作家活動を開始するということなら、経済不況のためにアメリカでも一般に社会意識の強まった、一九三〇年代に文筆活動を行なった作家たちに、ほぼ共通して見られた現象だ、として片付けてしまふことも出来るであろう。「現に、徹底した個人主義者と見做されていたヘミングウェイ (Ernest Hemingway) でさえ、その社会的な「転向」が取沙汰された。また、この十年間を飾る記念碑的な作品が、土地を追われた農民たちの悲惨な姿を、社会問題の一つとして、雄大なスケールで描いた、スタインベック (John Steinbeck) の大作『怒りのぶどう』 (The Grapes of Wrath) (一九三九年) であることは、よく知られているところである。しかし、同じく左翼的な立場に立つといても、やはり、白人のアメリカ人と黒人のアメリカ人とは、そこに、おのずから違いがある。常識的に言って、西欧デモクラシーの理念によって育てられた白人のアメリカ人にとって、たとえば共産党に入党することは、

西欧デモクラシーが彼に保障してくれている諸権利を意識的に犠牲にすることを意味するであろう。ところが、黒人のアメリカ人にとっては、西欧デモクラシーは、一応、理念としては、たとえば、人間の自由平等を唱えながら、事実においては、白人優位の原則を押しつけてくる束縛でしかないものであるから、共産党への入党ということは、ある意味では、西欧デモクラシーからの解放、脱出でさえある。リチャード・ライトがジョン・リード・クラブに入会し、そこから共産党に入党した、その動機として、作家として立ちたい、作品の発表場所を確保したい、といった気持ちがあるが、ある程度、働いていたように見受けられるふしがあるが、黒人とはいえ、やはりアメリカ人として西欧デモクラシーの理念を信奉するようになっていたライトが、何の抵抗感も感ずることなく共産党に入党している点は注意されてよい。

さて、ライトの共産党への入党に関する、以上の観察は、リチャード・クロスマン (Richard Crossman) の編集した、共産主義からの転向者の手記『期待を裏切った神』 (The God That Failed) (一九五〇年) にライトが寄せた手記に基くものであるが、クロスマンは、その編著の

(59) 「脱出」としての自由

序文に、「シカゴで苦闘している黒人作家ライトが、殆んど当然のこととして共産党に入党した事実は、そのこと自体、アメリカの生活様式に対する告発なのである。」と書いて⁽⁷⁾いる。

ところで、『期待を裏切った神』に手記を寄せているアーサー・ケストラー (Arthur Koestler) にしても、ステイヴン・スペンダー (Stephen Spender) にしても、アンドレ・ジイド (Andre Gide) にしても、西欧のインテリたちが、あるいは共産党に入党し、あるいは共産主義に接近したのは、ファシズムの擡頭を前にして、ファシズムの擡頭を許した西欧デモクラシーに失望し、ファシズムを打ち破るためには、いわゆる「ブルジョア的自由」を犠牲にすることを辞さなかったためであるが、ライトにとって、共産党への入党は、むしろ、理念としてはなく事実としての西欧デモクラシーがアメリカ黒人に拒否していた「自由」の獲得であり、そのような西欧デモクラシーからの脱出であった。

しかし、破局は意外なところからやって来た。かつて、ライトがアメリカ南部から脱出した、その脱出が、南部の一部をたずさえた上での脱出であったように、西欧デ

モクラシーから共産主義へのライトの脱出は、西欧デモクラシーの理念をたずさえた上での脱出であった。(従って、あるいは、ライトの共産主義への転向は徹底さを欠いていたという批判も可能であろう。) ライトは、アメリカ黒人の一人として、共産主義が黒人解放の力となってくれるものであることを疑わない。しかし、人間の尊厳、個人の自由、といった西欧デモクラシーの理念に養われたアメリカ作家として、ライトは、共産党の政策についていけないものを感じ、「裏切り者」と呼ばれながら、共産党から出ていくのである。ライトの苦悩は、ライトの次の言葉に要約されている——「たとえ共産党がわたしの味方でなくとも、わたしは共産党の味方になろう。」

リチャード・ライトと時期を同じくして共産主義に接近した西欧のインテリたちは、一九三九年の独ソ不可侵条約を境にして共産主義から離れていくが、彼らが一旦見切りをつけた西欧デモクラシーも、結果的には、充分ファシズムの挑戦に応じて、これを打ち破り得るものであることが明らかになった。こうして、西欧のインテリたちは西欧デモクラシーの陣営にもどるのであるが、ライトには、共産党を離れたからといって、西欧デモクラ

シーの陣営にもどるということとは出来ない。ライトは帰るべきところを持たなかったのである。そこで、ライトは、アメリカ共産党を脱党すると間もなく、白人の妻を連れてアメリカを脱出し、パリに移り住んで（一九四六年）、サルトル（Jean-Paul Sartre）と親交を結んだり、ゴールド・コースト（ガーナ）を訪れたりして「そのときの記録が『黒い力』（Black Power）（一九五四年）である。」、アメリカ黒人としてより西欧的な文化人としての立場から作家活動を行なって、この世を去るのである。

「黒人」という烙印を押されてアメリカ社会に生まれるということは、言うまでもなく、さまざまな苦しみに堪えて生きなければならないことを意味する。しかし、人間が人間となること、つまり、人間の自由というものを、「脱出」という形でしか考えられなかったところに、一人の黒人としてアメリカ社会に生まれたリチャード・ライトの不幸な限界があったと言えるのではなからうか。

三

前章でも述べたように、リチャード・ライトは、共産

黨員としての活動のなから作家として登場してくるのであるが、その第一作、短篇集『アンクル・トムの子供たち』（一九三八年）は——一九四〇年に増補された形でいうと——ライトが、幼い頃から、白人社会における黒人として生きる道を、身につけていかざるを得なかった、その過程を描いた自伝的スケッチ『ジム・クロウの生活倫理』（The Ethies of Living Jim Crow）を、いわば、序文として掲げて、五つの短篇——前にも一寸ふれた『ビッグ・ボーイの故郷脱出』、それに『河のほとりで』（Down by the Riverside）、『長い、黒い歌』（Long Black Song）、『火と雲』（Fire and Cloud）、『輝く明けの明星』（Bright and Morning Star）——をおさめている。ところで、作者ライトの意図が、アメリカ民主主義の矛盾に苦しまなければならない「アンクル・トムの子供たち」の姿を克明に描き、烈しく、これに抗議するところにあったことは間違いない。そして、自らもその一員であるアメリカ黒人たちの惨状を描くライトの筆の烈しさは、そのような現実から脱出しようとしたライトの願いの烈しさに通ずるのである。

第一の短篇『ビッグ・ボーイの故郷脱出』では、黒人

の少年ビッグ・ボーイが、黒人の水泳は禁じられている白人の池で、仲間三人と泳ぎ、仲間の二人が白人に射殺されると、その銃を奪いとって、逆にその白人を射殺してしまい、故郷を脱出するまでが描かれる。逃げおくれた、ビッグ・ボーイの仲間は、白人たちのリンチにあつて、焼き殺される。

第二の短篇『河のほとり』では、洪水のなかに、産褥に苦しむ妻、それに老母と息子の三人と共にとり残された黒人マンが、黒人ボブが白人から盗んできてくれたボートで脱出をはかり、夜の濁流の中を病院に急ぐ途中、ボートの所有主に銃を向けられて返還を要求されたために、その白人を射殺、やっとのことで病院に着いた時には手遅れで妻は死んでしまい、翌朝には捕えられて射殺されるまでが語られている。

第三の短篇『長い、黒い歌』がとり扱っているのは、自作農を夢みて営々と十年間も働きつづけたあげく、棉を売りに行ったその留守に、自分の妻を白人のセイルズマンに犯されたために、翌朝またやってきたその白人を射殺して、白人たちの襲撃にあい、家もろとも焼かれてしまう黒人農夫サイラスの悲劇である。

こう見てくると、これらの短篇では、黒人が白人を殺し、白人が黒人を殺す、という痛ましい人間同志の殺し合いが繰り返される。黒人が白人を殺すのは、窮鼠猫を嚇むの類で、自分が殺されまいとしてなのであるが、白人は、まるで虫けらでも殺すように黒人を殺している。

従って、黒人たちは、何時なるとき、思いもかけない事態の成行きで、たとえば『長い、黒い歌』の農夫サイラスのように、妻も、財産も、生命までも奪われる結果にならぬとも限らない。「白人の奴らには、なんでも、とられちまう。土地はとられちまう。自由はとられちまう。女はとられちまう。それに、命もとられちまうんだ。」というサイラスの悲痛な叫びが、作者ライトの意図としては、「長い、黒い歌」——いつ果てるともなく黒人たちに歌われてきた、歎きの歌なのだ、というのである。そのような黒人たちにとっては、もはや、ビッグ・ボーイのように故郷の土地から逃げ出す以外に生きる道は残されていないのであろうか。

それに答えて、ライトは、次の二つの短篇『火と雲』、『輝く明けの明星』において、被圧迫民族の団結を呼びかける共産主義のイデオロギーこそ黒人解放の道を開く

ものであることを語ろうとしているようである。

『火と雲』は、白人たちの暴力行為にも屈せず、団結の力によってデモ行進を行ない、遂に黒人たちを飢えから救うことに成功する黒人牧師テイラーの物語りであり、「ここで、アメリカ南部における黒人教会が、しばしば黒人解放運動の拠点となってきたことを指摘しておくのも無駄ではあるまい。『輝く明けの明星』は、共産党員である二人の息子を殺され、自らも生命を奪われながら、党の秘密を守り抜いた黒人の老婆を讃える物語りである。かつて、エホバの神は、モーセを立てて、エジプトの地において奴隷として苦しみつづけたイスラエル民族を解放し、「昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らを照し、昼も夜も彼らを進み行かせられた。」(旧約聖書、出エジプト記十三章二十一節)が、今や、エホバの神に代って、団結の力が——テイラー牧師をデモ行進の先頭に立てたのも、団結の力であった——「雲の柱」、「火の柱」となって、黒人解放運動を導いていく。また、イエス・キリストは、イエスを信ずる人々にとって、人間の暗黒に光明を与える「輝く明けの明星」(新約聖書、ヨハネ黙示録二十二章十六節)であるが、素朴

なキリスト教信仰に生きた黒人の老婆も、共産党員の息子たちから「イエスを忘れて、自由を求める黒人の戦いに希望をかけること」⁽¹⁰⁾を教えられると、白人に忍従することを教えるキリスト教ではなくて、共産主義(共産党)こそ、長かった黒人たちの夜の闇を貫いて光をはなち、人間として黒人が解放される、その夜明けを約束する「輝く明けの明星」であることを理解するのである。

前にもふれた、ライトの転向の手記のなかで、「共産党に、立派な、光榮ある役割を持たせておいた物語り」とライトが述べているのは、恐らく、これらの短篇のことであろう。

一言でいって短篇集『アンクル・トムの子供たち』は、共産主義に対するライトの情熱がライトに書かせた作品集である。しかし、夫々の短篇は、そのことから直ちに連想されるような、目的意識だけがあらわに目立つプロバガンダの作品では決してない。ショッキングな事件を描いている割に、ライトの筆は落ち着いている。そして、これは自伝小説『黒い少年』において最も良くその特色があらわれているのであるが、ライトの筆は、ときに、詩的な高まりをみせる。ライトは、文学史的には、

セオドア・ドライサーにつながる自然主義の作家ということになろうが、その作品に見られる素朴なリリズムは、たとえばジョン・スタインベックの作品におけるリリズムにも似て、ライトの文学に、ある程度の芸術的香気といったものを与えていると言えるようである。

さて、ライトの最初の本格的な長篇小説であり、また芸術性に欠けるところがあるとはいえ、ライトとしては最大の成功作となった『土地っ子』(Native Son)(一九四〇年)は、一般に、今世紀の黒人作家たちの間に広く行なわれた、人種問題をテーマとする小説の総決算ともいべきものとされている。つまり、黒人作家による抗議の文学は、この作品において、最終的な表現を得た、というわけであろう。ところで、これまで我々が考えてきた「脱出」または「自由」という観点から眺めると、この作品は、人間としての自由を反社会的な形でしか求められなかった黒人の悲劇を扱ったもの、と言うことができるであろう。

主人公ビガー・トマスは、シカゴのブラック・ベルト(黒人地帯)に住む二十歳の黒人である。父親のない生活は極度に苦しい。母親は熱心なキリスト教徒である

が、彼女の信仰はビガーに反感を抱かせるだけである。ビガーは、白人のいわゆる「バッド・ニガー」(悪い黒人坊)で、タイヤを盗んで少年院に送られたこともある。

白人優位の社会のなかで、白人たちに相手にされないことを憤りながら、内心では不安に怯えている。ベッシーという黒人の恋人もいるが、肉欲の対象としてだけの女である。さて、ビガーは、黒人救済事業に努力している白人ドールトンの家の自動車運転手として働かれることになるが、働かれた日の夜、酒に酔いしれた、ドールトンの娘メアリを彼女の寝室に運んだところへ、メアリの母親(盲目である)が入って来る。白人の女の寝室に黒人が入っていることがわかれば、それだけで重大な嫌疑をかけられることになる。そこでビガーは、メアリの部屋に入っていることを、メアリの母親にさとられまいとして、メアリの口を強く抑えつけ、気がついたときにはメアリを殺していた。この殺人は、あくまで偶発的なものであるが、この殺人行為を契機として、ビガーの行動は計画的となる。ビガーは、まず、自分の犯行を隠すために、メアリの死体を炉の中で焼いてしまい、それから、メアリの友人で共産党員のジャンをうまく利用して、共

産院にからんだメアリ誘拐事件を仕組むが、炬の中からメアリの白骨が発見され、一切が明るみに出ようとするのを見てとって逃げ出し、途中で足手まといになるベッシーも殺してしまい、遂には追いつめられて捕えられ、裁判にかけられて死刑の宣告を受ける。

こうして、この作品は、ドライサーの大作『アメリカの悲劇』(An American Tragedy)(一九二五年)に似た、極めて単純な構成(犯罪―逃走―逮捕)のなかで、一見スリラー小説を思わせる荒々しい行動をスピーディに描いていく。そして、最後に、裁判の場面がかなりの長さにとって描写されている。

ところで、この裁判での圧巻は、なんとといっても、ビガリーの弁護を買って出たユダヤ人の老弁護士マックスの演説であるが、この裁判の焦点は、何故にビガー・トマスのような黒人が生まれてくるのか、ということにある。恐るべき殺人犯ビガー・トマスは、なにか突然変異的な現象であるのか。その問いに対しては、まず何よりも、この作品の題名(一応『土地っ子』と訳しておいたが)が端的に答えてくれている。題名の Native Son という英語は、言うまでもなく、ある土地に生まれついた、そ

の土地の人間、という意味であるが、この小説の場合、その土地というのは作者ライトの意図としては、一義的にはアメリカに他ならず、ビガー・トマスは、市民としての権利を黒人には拒否するアメリカという社会が生んだ「アメリカならでは生まれ得ぬ人間」ということになら。かつて、ドライサーが立身出世と富への憧れのために自らの恋人を殺して電気椅子に送られるクライド・グリフィスの悲劇を、アメリカ社会に数多く起り得る悲劇の一つ、アメリカ社会ならではの悲劇という意味で、『アメリカの悲劇』と題したように、ライトは、ビガー・トマスを、あえて、生粋のアメリカっ児と呼ぶのである。従って、アメリカ社会は、自らの責任において、ビガー・トマスという殺人犯を、自らの産んだ息子として、換言すれば、黒人たちに白人優位の原則を押しつけるアメリカ民主主義の産んだ犠牲者として受けとめなければならぬ——これが、この作品が一面において訴えようとしている点である。「なお、カール・M・ヒューズ(Carl M. Hughes)は、その著『黒人小説家』(The Negro Novels)(一九五三年)のなかで、ビガーは「土地っ子」であるのに「土地っ子」には当然与えられてよい権利を

奪われているという点で、『土地っ子』という題名が皮肉に用いられている、という意味のことを言っている⁽¹³⁾。」

「ところで、前にも記したように、ビガアの殺人行為は偶然の所産といってよいものであった。しかし、問題は、ビガアがその犯行に対して責任を問われる立場に追い込まれたとき、この殺人行為が、遡及的に、黒人ビガアには彼としては最初の自律的な行為として自覚されてくる、という点である。そのところを、ライトは、ビガアの弁護人マックスに、次のように言わせている——「この男(ビガア)の犯行は、復讐行為というようなものではなかったのであります。……」

彼は、偶然に、何の考えもなく、計画もなく、何の動機も意識せずに、メアリ・ドールトンを殺したのであります。しかし、殺した後で彼はその犯行を認めたのであります。そのことは大事なことであります。つまり、その犯行は、彼のこれまでの生活の中で、最初の、充実した行為だったのであります。……最も意味のある、興奮させるような行為だったのであります。彼がその犯行を認めたのは、それが彼を自由にし、選択し、行動する可能性を——自分で行動し、しかもその行動が重要な意味

をもっていることを感ずる機会を、彼に与えたからなのであります⁽¹³⁾。」つまり、ビガアは、メアリ殺害を契機として、白人優位の原則の中に失われていた「行動の主体性」を獲得し、自己の行動を自己の責任において選びとっていく人間として生きること——実存哲学的に言えば、これが人間の「自由」ということになるのであろう——を始めるのである。人間は自らの行為の責任者であるとき人間となる、と言えるならば、皮肉にも殺人という非人間的な行為の責任を問われることになった時、黒人ビガアの「人間」は回復されるのである。ビガアの不幸は、アメリカ社会における黒人の自由が反社会的な行動という形でしか許されない、という点であり、それは、次に引用するライトの告白にも見られるように、黒人としてのライトの不幸に他ならないのである。

「なるほど、わたしは嘘もついたり、盗みもした。たぎり立つ怒りの感情を抑えるのに苦労した。喧嘩もした。わたしが殺されずにすんだのは、単なる偶然だったのかも知れない。……だが、拒否すること、反逆すること、攻撃に出ること、それ以外は、わたしが自然にふるまい、実在する人間として、本来のわたし自身となる、

どんな道を、(オメリカ)南部は、わたしに許してくれたいというのだろうか？」(傍点は筆者)

以上見てきたところからも分かるように、ピギー・トマスの問題は、一面においては、黒人問題においてその矛盾を露呈したアメリカ社会の問題であり、また他の一面においては、その社会からの逸脱という形でしか存在し得ぬ黒人の自由の問題である。ここには、ライトの共産主義者としての立場がうかがわれると共に、黒人の自由の問題が、広く人間の自由の問題として、哲学的な思弁の形で追求されていくことを予想させるものがある。

さて、『土地っ子』の成功のあと、一九四五年に、前章でも何度かふれた自伝小説『黒い少年』が書かれることになるが、その前年の一九四四年に、作家活動を共産党員として開始したライトは、共産党から完全に手を引き、共産主義そのものを自己の信条としては放棄するようになっていた。共産党脱党後のライトの作品が、このように、自己の生い立ちを回想する自伝小説であることは興味深いことであって、政治的立場をはなれて、アメリカ社会における一人の黒人としての立場にもどったライトは、作品『黒い少年』において自己検証を行ない、

新らしい出発にそなえたのであろう。『黒い少年』は、一言でいえば、ライトが四歳の頃に火遊びをして家を焼いてしまふという出来事の記憶から始まって、十九歳頃アメリカ南部を脱出するまでの、ライトの黒人としての生活体験を、リリカルな筆で描いたものである。ところで、ライトがこの自伝小説で行なった自己検証において確かめたものが何であったかと言えば、黒人の自己発見を許そうとしないアメリカ南部を脱出することに、少年ライトがその全エネルギーをかけていた、という事実である。しかも、ライトとしては、その脱出は「アメリカ南部を忘れるためではなくて、アメリカ南部を理解し、その苛酷な掟が、わたしに、南部の子供たちに、どのようなことをしたのか、それを理解するための脱出」⁽¹⁵⁾のもりであった。こうなると、「脱出」は、ライトにとって、積極的な意味さえ帯びてくる。ライトは、一九四六年に、家族を連れて、アメリカを「脱出」し、パリに移り住むことになるが、ここで書かれることになる次の長篇小説『局外者』(The Outsider)(一九五三年)は、自己から「脱出」した男の物語り、と言ってよい作品である。ライトは、『土地っ子』において取りあげた、黒人の

(67) 「脱出」としての自由

自由の問題を、人間の自由の問題にまで押し広げ、人間の自由とは何か、という問いを、一人の人間がその *being*、*being* を失なうという設定で、追求している。それにしても、この作品から受ける印象は、率直に言って、「自由」の実験という、ライトの、恐らく真面目な意図にも拘らず、この作品が、いかにも雑然とした内容をもった、その不自然さがあらわに目立つ作品である、ということである。

主人公クロス・デイモンは、シカゴの郵便局につとめる黒人で、「因みに、この作品で、クロス・デイモンが黒人であるということには、何ら積極的な意味はない。クロスは、どういう人種の間であつてもよいのである。」かつてはシカゴ大学に籍を置いて、哲学を専攻したインテリである。妻との間に子供が三人あるが、現在は妻子と別居している。一方、クロスには恋人があり、この女は妊娠している。ところが、この女が未成年者であることが判明して、結局、クロスが別居中の妻と正式に離婚して、この女と結婚の手続きをとらなければ、未成年者の女を妊娠させたことは犯罪を構成する。そこで、クロスは別居中の妻と離婚する手続きをとろうとするが、妻

の方で、これに応じようとしなない。こういう苦しい立場にあるとき、クロスは、地下鉄事故にあり、実は軽い負傷をしただけであるが、別の死体がクロスと断定されて、その事故で死亡したことにされてしまう。クロスは、自分の葬式が行なわれるのを確かめてから、ニューヨークに高飛びしようとするが、ある淫売宿で仕事仲間のジョー・トマスに会ってしまふ。そこで、クロスは、自分が生きていることを世間に知られては困るので、ジョーを殺す。さて、ニューヨークへの列車の中で、食堂車の給仕で共産党員の黒人ボブと知り合いになり、また、ニュー・ヨークの地方検事エリ・ヒュウストンと近づきになる。ニュー・ヨークに着いてからは、偽名を使って部屋を借りて歩くが、ある下宿屋の女主人から聞いた黒人墓地に出かけて行って、手頃な死者の名前を探し出し、ライオネル・レインと名乗ることにする。それから、クロスは、ライオネル・レインという男の生前の様子を調べ上げ、人口統計局からライオネルの出生証明書を作成して貰い、ライオネル・レインになりすまして、列車の中で知り合いになった共産党員ボブの家を訪れる。こうして、クロスは、共産党と関係を持つよう

になる。さて、クロスは、共産黨員ポプの家で紹介された、同じく共産黨員の白人ギルバートとその妻エヴァにすすめられて、二人の住んでいるアパートに同居するようになるが、そのアパートの主人ハーンドンは、実は黒人排斥論者である。そこで、クロスの中で、ギルバートとハーndonは争いを起し、殴り合いが始まる。そこへ、クロスは出て行って、争っている二人を殴り殺してしまい、その犯行を隠すために、二人が殴り合いをして死んだように見せかける。もちろん、この事件で、クロスは、警察に呼ばれたりするが、「そして、クロスは、さきに列車の中で知り合いになった地方検事のヒュウストンに再会することになる。」クロスは、つきとめられない。ところが、その犯行をヒルトンという名の共産黨員が感づいているらしいことを知ったクロスは、ヒルトンをその下宿で射殺する。一方、ギルバートの妻エヴァは、黒人であるクロスに同情し、クロスに愛情を感じずるようにならなっていたが、クロスがヒルトン殺害事件で警察の取調べを受けている間に、共産党の内偵で判明したクロスは、警察に教えられて、自殺してしまう。クロスは、警察にもつきとめられ、クロスは、妻子

と対面させられたりする。地方検事のヒュウストンは、すべての殺人がクロスは、証拠不十分ということで釈放される。こうして釈放されたところを、クロスは、尾行してきた共産黨員に射殺される。

以上が、「局外者」クロス・デイモンの物語りの粗筋であるが、一人の人間が、たまたま死亡したことにされてしまうという形で得た自由において生きようとする、その人間をめぐって次々と殺人が起る、というこの物語りは、一体何を語ろうとしているのであろうか。人間の自由とは、それが「……からの脱出」という形で捉えられる限り、他の人間の自由の犠牲の上に成り立つものである、ということなのであろうか。しかも、その自由は、その自由を得たクロス自身の「人間」をも破壊させる類の自由であった。クロスの最初の殺人行為は、あくまでも自らの自由を確保しておくためのものであったが、やがて、クロスは、「太陽のせいであらびや人を殺す」ムルソー（アルベール・カミュ (Albert Camus) の『異邦人』(一九四二年)の主人公)のように、「目的もなく、罪意識もともなわぬ殺人行為を犯すようになる。

(69) 「脱出」としての自由

自己からさえ「脱出」して、いわば自由の絶対値において生きようとするクロスにとって、世界は一箇の混沌でしかなく、その世界を前にして、クロスもまた、自らが、明日もなく、帰るべき祖国もない、一人の異邦人であることを思い知らされるのである。

さて、『局外者』が発表された一九五三年の復活祭に、ライトは、パリの自宅に招いた客の一人に、執筆の仕事も一段落ついたようだからアフリカに行ってみないかとすすめられて、思い出したように、自分が人種的にアフリカ人であることを自覚するのである。そして、妻にもすすめられて、アフリカ行きを思い立ち、まず、その昔奴隷貿易で栄えたリヴァプールまで飛行機で行き、その港からゴールド・コーストにむけて出発する。このときの旅行記『黒い力』(一九五四年)は、ライトのいうところによれば、マルキシズムの立場から、過去五百年以上になたつて次々とゴールド・コーストを支配した、イギリスその他の西欧諸国の植民地政策を批判し、エンクルン(Kwane Nkrumah)が議会人民党(Convention People's Party)を率いて自治権獲得運動を展開していた、ゴールド・コーストの現状を、客観的に伝えようと

したものである。ところで、ライトの先祖の土地アフリカは、アメリカ人としてのライトにとって、全く異質な世界であった。たとえば、ゴールド・コーストの港町タコラディからアクラに行くバスのなかから見た光景にふれて、ライトは、「……わたしが見つけていたのは、わたしにはその法則がわからない世界、わたしにとっては謎でしかない反応を示す顔であった。ここには、わたしが予言したり、予想したり、当てにしたりすることの出来るものは、何一つとしてなく、われ知らず、漠然とした不安な思いにかられ出した。」と書いている。アフリカにおけるライトは、所詮、「異国における異国人」であった。ライトは、アフリカを訪れて、自らが、この世界のなかに帰るべき祖国をもたない「異邦人」であることを、ますます強く感じさせられたに相違ない。

黒人作家ライトにとって、自由とは「脱出」であった。そして、「脱出」とは、そこから脱出してきた世界を理解するためのものであった。それでは、ライトは、そのアメリカ脱出において、アメリカをその問題性において充分に理解するに至ったであろうか。その問いに対して作品の形で答えることはしないままで、ライトはこの世を

去ってしまった、と言わざるを得ない。何故なら、たとえば、それが最後の作品となった長篇小説『長い夢』(一九五八年)は、本稿の冒頭において簡単に論じておいたように、安易なアメリカ脱出をもって、本当の解決にはならない解決を、アメリカ社会における黒人レックスの問題に与えようとしている作品だからである。前にも書いたように、人間の自由というものを「脱出」という形でしか捉えられなかったところに、黒人作家としてのライトの不幸な限界があったことは、充分認めなければならぬが、結局、ライトの「脱出」は敗北主義に通ずる、と言っているのではあるまいか。

- (1) Richard Wright: *Black Boy* p. 189.
- (2) *Ibidem* pp. 185~186.
- (3) *Ibidem* p. 187.
- (4) *Ibidem* p. 192.

- (5) *Ibidem* p. 194.
- (6) Richard Crossman (ed.): *The God That Failed* p. 119.
- (7) *Ibidem* Introduction p. 4.
- (8) *Ibidem* p. 160.
- (9) Richard Wright: *Uncle Tom's Children* p. 105.
- (10) *Ibidem* p. 177.
- (11) Richard Crossman (ed.): *Op. Cit.* p. 164.
- (12) Cf. Carl M. Hughes: *The Negro Novelist* pp. 50~51.
- (13) Richard Wright: *Native Son* p. 364.
- (14) *Idem*: *Black Boy* pp. 193~194.
- (15) Cf. *Ibidem* p. 194.
- (16) *Idem*: *Black Power* pp. 37~38.
- (17) Cf. *Ibidem* p. 108.

(一橋大学講師)